

水稲有機栽培 雑草防除のポイント

望ましい育苗: 中苗(育苗日数30~40日、葉令3.5~4.0、草丈20cm以上) 望ましい移植時期: 5月中旬

有機物の表面散布と深水管理

～耕種作業で抑草～

1 代かきは2回以上

1回目の代かきで雑草を出芽させ、2回目の代かきで出芽した雑草を土中に埋没、もしくは水中に浮遊させる。代かきの間隔は2~3週間程度、その間は湛水状態にする。ノビエには効果が高い。コナギには効果がない。

2 移植直後に米ぬかやくず大豆等の有機物を散布

出芽した雑草には効果が低いので、移植当日に処理する。水稲の作付が遅いほど(5月中旬以降)、コナギに対する効果が安定する。

3 活着後は10~15cmの深水管理

移植直後の水深は水稲が水没しない5cm程度とし、生育に合わせて徐々に水深を深くする。ノビエには効果が高い。コナギ・ホタルイにはノビエほどの効果はない。

除草機による除草作業

～適期作業と機械の調整で高い除草効果～

1 1回目の除草作業は移植後7日以内に必ず行う

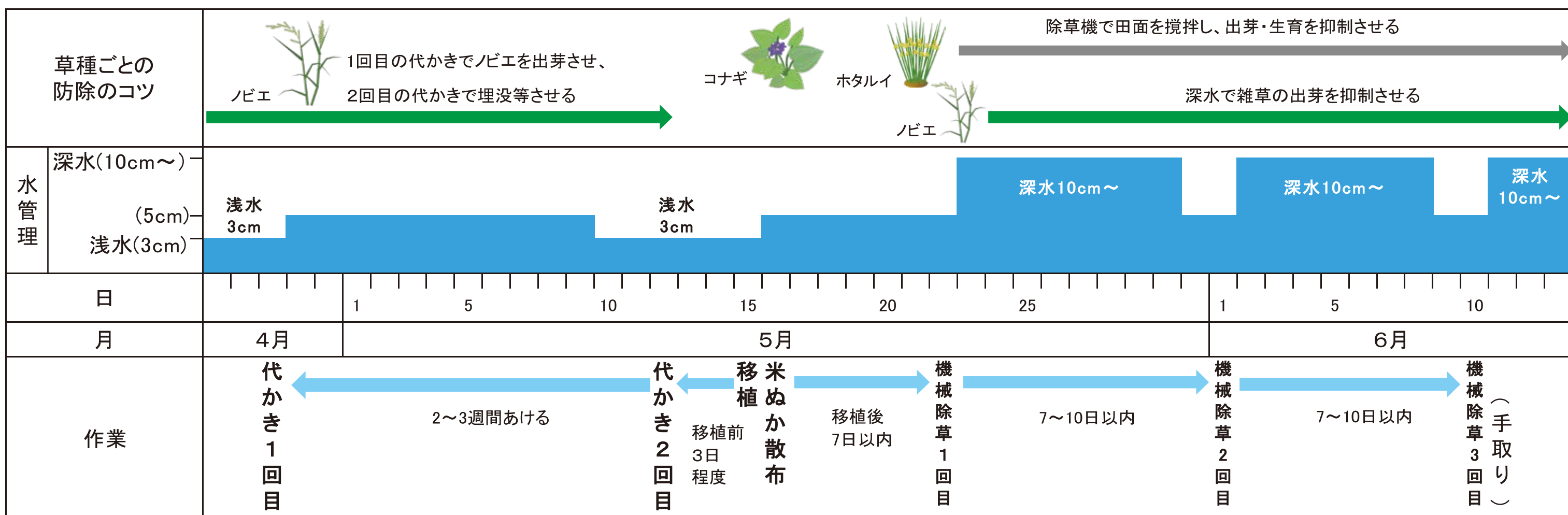
水稲が活着し、ノビエが2葉期になる前の移植後7日以内に1回目の機械除草を行う。以降、7~10日間隔で2回目、3回目の除草を行う。作業時の水深は3~5cm程度とする。

2 除草部の調整

①中耕後にイネ苗が少しなびく状態になるように除草部の高さを調整する。
②除草作業開始直後、低速で作業した後、一度停止して水稲の状況や雑草の浮き上がりを確認する。苗が立って、雑草が浮かばない場合や苗が起き上がらない場合はローターやレーキの高さ、深さ、速度を調節する。

3 除草作業後は速やかに深水管理に戻す

生育前半の水管理と除草のタイミング



問題になる主な雑草

●ノビエ

代かき直後から種子が発芽する。代かきを2回行い、発芽したノビエを防除する。深水管理も抑草効果が高い。



●コナギ

草丈は低いが、窒素を旺盛に吸収するため、水稲の収量が減少する。湛水下の低酸素条件でも発芽するため、耕種的な抑草技術では防ぐことはできない。有機栽培を続けた水田で増える傾向にある。



●ホタルイ類

株基部が越冬する多年生雑草だが、主に種子繁殖する。種子は長期にわたり発芽するため、移植後の防除が必要となる。



●クログワイ・オモダカ

塊茎で繁殖し、代かきや中耕等による防除では防ぐことはできない。発生がみられない水田を選定し、発生がみられた場合は早めに手取りで除草する。



有機栽培を行う水田の選定に当たっての注意点

- 雑草、特に多年生雑草の少ない水田を選ぶ。
- 用排水が完全に分離している水田を選ぶ。
やむを得ず慣行栽培ほ場を通過した水を利用する場合は、緩衝水田等を設け、用水を一時的に貯留・浄化して、有機栽培水田に有機農産物のJAS規格使用禁止資材が直接流入しないようにする。
- 周辺及び隣接水田からの有機農産物のJAS規格使用禁止資材の飛散・流入がないよう、防止策を講ずる。

参考: 農研機構「高能率水田用除草機を活用した水稲有機栽培の手引き」